全校朝会の話　「二人のジャンパー」

まもなく北京で冬季オリンピックが開催されますが、今日はみなさんが生まれる前の 1998 年に長野オリンピックのジャンプ競技の話をします。昨年「ヒノマルソウル」という映画でこの話が映画化されたので知っているという人も多いはずです。このオリンピックで、私たち見る者に強い印象を残したのが、スキージャンプ、ラージヒル団体の戦いでした。

今日はこの競技にかかわった二人の人物を紹介します。左側が原田雅彦さん。右側が西方仁也さんです。

まずは原田雅彦さん。この人は長野オリンピックの前のリレハンメルオリンピックでもジャンプの日本代表でした。このリレハンメルオリンピックのとき日本は４選手が１回目を飛び終わり、そして二回目も三人が飛んでトップに立ち、２位を大きく引き離していました。そして最後のジャンパーが原田選手、普通に飛べばもう日本の優勝は間違いなかったので、誰もが金メダルを瞬間を見ようと、日本国中が原田選手のジャンプに注目しました。しかし、予想に反して原田選手はこれまで見せたことのない失敗ジャンプに終わり、日本は金メダルを逃して銀メダルに終わりました。この写真の中央で泣き崩れているのが原田選手です。これ以後原田選手は次のオリンピックでこの挽回をするために競技にとりくみますが、このオリンピックでの失敗が大きな心の傷となり、４年間苦しみ続けました。そしてこの長野オリンピックの舞台に立ちました。

一方の西方さんも、日本を代表する名ジャンパーでした。リレハンメル五輪に出場し、ジャンプ団体で銀メダルを獲得。次は金、しかも舞台は地元・長野。最高の世界一を夢見ていました。しかし、スランプから成績が振るわず、長野オリンピックの代表には入れませんでした。

しかも代わりにお願いされたのが、競技の安全性を確認するため出場選手に先立って飛ぶ「テストジャンパー」でした。4 年前からの「落差」に、「自分が出なくてもいいのでは」という迷いや、自分へのふがいなさが胸中を交錯したといいます。　この時、自分たちテストジャンパーが長野でのメダルの行方を左右することになるとは、思っていなかったそうです。

1998 年 2 月 17 日。大観衆が詰めかけた長野県白馬村のジャンプ台は大雪でした。競技当日、西方さんはやはり選手ではなく「テストジャンパー」という役割に心にもやもやを抱えていたそうです。出場選手が 1 本目のジャンプを飛び始めても、素直に日本選手を応援できなかったそうです。やはり選手になれなかった悔しさや残念な気持ちでいたそうです。

競技開始前、控室にいた自分に近づいてきたのが、日本の 3 人目で飛ぶ予定の原田雅彦選手。同い年であり、同じ世界で戦った友人であり、代表の座を争ったライバルでもありました。その原田選手に西方さんは不意に声をかけられました。

「手袋か何か、貸して。アンダーシャツでもいい」

意味が分からず、うっかり用意し忘れたのかと思い、西方さんは着ていたシャツを脱ぎ、原田に手渡しました。

各国の選手が１本目を飛び始めました。スタートゲートに向かう原田選手が、自分たちテストジャンパーの控室近くにあるエレベーターから出てきたとき。その紫の襟元に、視線が止まったそうです。

ついさっきまで自分が着ていたシャツだ。一瞬、目が合った。原田選手は、何か決意を秘めているような表情を浮かべていた。その時の心境を、西方さんは、はっきりと覚えているそうです。そして「『一緒に戦うんだ』っていう原田の気持ちが、何となくそこで分かって、嬉しかったそうです」

しかし、１本目を終え、日本はまさかの４位に沈んでいました。この原田選手の「失敗ジャンプ」が響いたようです。ジャンプ直前に突然雪が強まり、助走スピードが上がらない。「雪が助走路に積もったせいで、スキーが滑っていないのが分かった」と西方さんはいいます。１本目を終えた時点で日本は首位から13・6点差。さらに悪天候で競技打ち切りとなれば、日本は金はおろか、メダルすら逃してしまう事態に陥っていました。

２本目開始までの間、日本のジャンパー、斎藤選手が西方さんに近づいてきて、真剣な表情で「あなたがたテストジャンパーが飛ばなきゃダメなんですよ」とつぶやいたそうです。この時、「せめてメダルを取らせてあげたい」と西方さんの心に火がつきました。ついにテストジャンパーの出番がきた。１人でも転倒していたら競技打ち切りの可能性があった。25人目、最後に飛んだ西方さんは「とにかく大きなジャンプを」という一心だった。雪で視界が遮られる中、K点を越す123メートルの大ジャンプをやってのけました。日本の逆転優勝に向けて十分な仕事でした。

競技は再開。日本の１人目、岡部孝信が137メートルを記録すると、テストジャンパーの控室は大いに沸いた。　「すごいな」。西方さんの胸中には、さっきまでとは明らかに違う感情が生まれていた。「『大会をつないだ』と心から思える瞬間だった」　３人目の原田選手が控室の横を通りながら、「よし、行くぞ！」と雄たけびをあげた。「がんばって！」と控室から励ます声。直後、原田選手の137メートルの大ジャンプが生まれ、４人目の船木選手が金メダルを決めた。

西方さんは、あの時の原田選手の雄たけびを忘れられないという。４年間めざした夢舞台に出られない、自分たちの思いを背負うという「証(あか)し」のようにも感じました。

自分もバーに座って飛ぶ感覚で、一緒に戦えた。最後には100%の応援ができたと西方さんは言います。